

## はじめに

本編では、鎌倉時代から戦国時代までを扱う。

本編の構成にあたっては、前刊となる『三股町史 改訂版』の構成を見直し、各時代で一つの章を立てて各時代の分量を大幅に増やした。分量を増やすことができたのは、近年に『宮崎県史』、『都城市史』といった自治体史の刊行や、『鹿児島県史料』の永続的な刊行に伴う史料の増加によって、南九州の地域史に関する研究が蓄積されてきたことによる。本編では、そうした成果を基にして述べていくことに意を用いた。ただし、それでも、中世における本町域に限っての著述は困難を極めたことから、古代から中世にかけての呼称であった「三俣院」、もしくは本町域とその周辺を含む「三股地域」をキーワードとして、各時代の様相を、なるべく史料に即して示していくこととした。

十一世紀、中央では、院政の施行により王権政治の色がより濃くなったが、この権勢を求め、次第に公家や武家を巻き込んだ皇族の対立が始まる。この争いのなかで台頭したのが源氏と平氏であった。台頭する契機を先に得たのは平氏であり、平清盛が太政大臣になると、その勢威は最高潮に達する。しかし、平氏の施政はそれまでの王権政治や公家政治とあまり変化のないものであり、そのなかで一族優先の所領配当を行うなど、恣意的なものでもあった。これを打破したのが源氏である。源氏一門と関東武士団の掌握に成功した源頼朝は、東日本において勢威を高めると、一気に平氏政権打倒を行う。そうして壇ノ浦の戦いで勝利した源氏は、鎌倉に武士のための政権を確立するのである。

この頃、日向国南部では、大宰大監平季基の力によって島津荘が誕生する。その後まもなくして、近衛家

の家司であった惟宗氏が当地へ下向して島津荘の下司職を得て、その地名をとって島津氏を名乗り、以後同氏は南九州政治史の中心に君臨する。なお、島津荘の誕生と拡大に関して、近年では、大宰府が公役履行遂行のため配置したなかに、日向国の担当として惟宗氏がおり、これが島津荘域拡大の一翼を担い、のちに島津氏となったという新見解が登場している。

平安期の王権政治ののち、有史初の本格的な武家政権が誕生した鎌倉期は、朝廷によるそれまでの支配体制に加えて、守護制の導入をはじめとした、御家人等武士層の掌握にも意が注がれた時代であった。土地領有体系においても、それまで混在していた王族や貴族を頂点（所有者）とする私領（荘園）と朝廷に帰属し税徴収の対象である国有地（公領）の整備がより一層進展した。ここに、当時そのほとんどが公家領であった荘園と公領が混在する、いわゆる「荘園公領制」の時代が幕を開ける。こうした動きのなか、幕府による全国的な統制を図ろうとし、次第に荘園を管理する地頭の配置権も掌握していき、中期以降、北条得宗家による支配を高め、その権勢をも増大させていくのである。ここに朝廷と幕府の二極的な全国支配のあり方が顕在化することとなり、このことは、地方へも大きな影響を与えることになった。

鎌倉初期における日向国には、当初島津宗家が守護兼地頭に任じられていたが、のちに北条得宗領とされ、幕府崩壊まで北条氏が管轄する。その頃、日本列島最大級の荘域となっていた島津荘では、惣代若林氏や肝付氏等、政務を担っていた在地官人等が勢力を伸ばし始め、有力国人として台頭する。こうしたことを受けて第一章では、平安末期及び鎌倉期における三侯院を、島津荘の伸張過程をふまえつつ紹介し、かつ、三侯院内に相当数存在していた在地領主についても、主要なものについて、史料の限りにおいて触れる。

鎌倉幕府の滅亡後、天皇を頂点とした政治体制を創出しようとして誕生した建武政権は、天皇集権化にこ

だわった後醍醐天皇の政治指針が受け入れられずに、政権の体制は次第に機能しなくなっていく。これを改善し、再び新たな支配体制を創出しようと、足利尊氏が反後醍醐帝の旗を掲げることになる。ところが機を一にして、足利氏内部での政権争いである観応の擾乱が起こる。尊氏の弟直義と尊氏の執事であった高師直の政治的対立である。とりわけ、この内乱に絡んだ直義の子直冬（尊氏実子）の九州下向は、島津氏が南北朝の間を揺れ動き、それに国人層も巻き込まれるという、混沌とした南九州の状況を生み出すことになった。また三侯院を拠点にした肝付氏の軍事行動は、薩摩半島で活動していた南朝方の懐良親王とともに、北朝が直接乗り出すほどの全国的規模の抵抗となっていた。ただ、この不安定な状況を払拭したのも足利政権であった。三代將軍義満は南北朝の合一を成し遂げ、この政治体制の一本化によって、全国的支配の安定をもたらしたのである。第二章では、こうした動向をもとに、南北朝期における三侯院の状況を述べるが、特に樺山氏による樺山領有の経緯やその在地支配についても、史料と研究動向に即して記述する。

室町期に入ると、足利將軍家の権力が低下していくなか、島津氏のような守護の系譜を引く守護大名が誕生した。しかし、自己の所領を確立した島津氏一族や国人層は、所領の防衛と、隣接する他領への進攻に意を注ぐこととなり、島津宗家の存在価値は低下の一途をたどっていく。また、応仁の乱によって全国騒乱の時代に突入すると、南九州では伊東氏と島津氏が熾烈な争いを繰り広げ、島津氏が勝利する。そこに登場した島津忠良は、薩摩半島南部を拠点として次第にその支配域を拡大し、長子・貴久を宗家当主として守護に就かせ、戦国大名島津氏を誕生させる。貴久は父の勢威を背景に薩隅日三州内での地位を確立させ、その後有力一族から支持を集めるまでに成長し、大隅国の肝付氏を従えた天正期前半頃、その存在価値を確立させる。宗家がそうした行動を展開していたちようどその時期、都城・三股地域を統一した北郷氏は、宗家を主家と

してこれを支えていく。そして天正末期、島津氏は九州制覇目前まで漕ぎつけたものの、それを抑止すべく大挙して九州へ上陸した豊臣政権軍に敗北し、島津氏は直ちに降伏した。豊臣政権は全国的に太閤検地を実施して石高制を導入する等の画期的な政策を取り入れたが、島津氏領内でも同様に実施した。このことは島津氏にとって、領地支配のメカニズムを大きく転換せざるを得ないものであったが、同時に、家臣団の支配地転換とそれに伴う家臣団の抵抗、そして朝鮮出兵における軍役に対する家臣団の不満等、大きな問題を残すこととなった。こうしたことを踏まえ、第三章では、伊東氏の「山西」進出、樺山氏による三俣院掌握の実態、在地領主との連携等を考察しつつ、南北朝合一後の三俣院の状況について詳述する。また第四章では、島津氏と伊東氏による日向争奪行動のなかで、北郷氏が勢力を強め三俣院を掌握する様相を述べる。そして島津宗家の権力確立と勢力伸張、その後の豊臣政権下における諸行動を踏まえつつ、都城・三股地域の状況を述べていくこととする。

本編では以上の構成で中世三股地域の歴史を概観していく。ここに示したものが、今後の本町における地域史研究に資することを期待したい。